しらおい再発見

地　域　学　講　座

8　虎杖浜地区

虎杖浜の町並み

しらおいのまちを歩いてみませんか

2017年３月

民族共生象徴空間整備による

白老町活性化推進会議

８　虎杖浜地区

内　容　虎杖小から、虎杖浜神社・観音寺・アヨロ台地・アヨロ鼻灯台・ポンアヨロ観音堂ほかを歩きます

ルート　①虎杖小学校・二宮尊徳像・石井宇之助顕彰碑・（虎杖浜駅）⇒

②虎杖浜神社・野口屋又蔵功績費・明治天皇駐蹕碑・アヨロ庚申塚・ポンアヨロ庚申塚・海難殉職者慰霊碑・魚霊碑　⇒

③ 青峯山観音寺・西国三十三観音・四国八十八観音・（上田圓生顕彰碑）　⇒

④アヨロ台地（アイヌ語地名・埋蔵文化財包蔵地）・アヨロ鼻灯台　⇒

⑤ アヨロ海岸・ポンアヨロ観音堂・（ホテルいずみ・スイコウの足湯）

①　**虎杖浜**　昭和１４(1939)年の白老村の大字廃止及び字名改称により誕生。

＊以前は敷生村（現虎杖浜から竹浦・北吉原・萩野まで）の一部。

＊この地に虎杖の名が現れたのは、大正３(1914)年の「虎杖小学校」及び昭和３(1928)年の新駅開設による「虎杖浜駅」命名時である。

・クッタリウス：クッタルシ＝クッタリ・ウシ⇒イタドリ・群生するところ　＝イタドリは漢字で「虎杖」。

・アヨロ：アイヨロアイ・オロ・オ＝矢・そこに・放つところ＝矢を放ち、神を祀るところの意味。

＊「アイロ 一 番屋壱ケ所、但萱葺桁行六間、梁間六間、御通行御役人様其外御昼休所 一 蝦夷家数五軒、此人数拾六人内乙名壱人、小使

役壱人 一 阿以呂場所　海岸南を受、西の方小山にて坂有、東の方凡二里計平地にして奥山続、南を受少し暖成方也。正月より配縄にて鱈の類漁事仕候得共、其節夷人飯料のみにて御座候。薪等の儀は遠山に候へ共、沢山に御座候。其外昆布有之土人入取掛出産物仕候」（文化６(1809)年『東蝦夷地各場所様子大概書』）

＊明治２(1869)年北海道と改め開拓使設置。１１国８６郡が置かれ「胆振国白老郡」の名称確定。

同６年には函館・室蘭・札幌を結ぶ札幌新道（現国道）が完成し、同９(1876)年、北海道大小区画の設置により３０大区１６６小区に分割され「社台村」「白老村」「敷生村」が成立。電灯点る。

②　明治以降の各地区への移住者（ポンアヨロのポンは、ポロ（大きい）に対して小さいの意）

＊アヨロ　明治５(1872)年、竹野久助（青森の人）が定住。同７(1874)年、野口屋又蔵一族が函館より移住、同２１(1888)年、室蘭から桜井富吉がアヨロに移住し商業営む。同３５(1902)年、吉田庄次郎、渡辺次郎吉、米田喜作、本間伊三郎らが移住。

＊クッタリウス　明治１４(1881)年、紺野甚作（岩手の人）がシキウより移住し農業の傍ら籠編販売。同２０(1887)年、石井宇之助（埼玉の人）が定住し漁業始める。同３６(1903)年、須貝末吉、同４０(1907)年、須貝権史郎らが移住。

＊ポンアヨロ　明治２８(1895)年、宮森太惣八が室蘭より移住、漁業に従事、同３０(1897)年、合田勝治、同３３(1900)年、刈屋卯之松、同３６(1903)年、宮沢又造らが移住、同４２(1909)年以降は新潟県からの漁業移住者多し。

③　漁業の変遷

・明治期の漁業はタラ・スケソウ・メヌケ・イカ等を釣りや刺網、手繰網で漁獲。しかし、仕込み制度により生活はなお苦しく、大正３(1914)年、宮森太惣八が初めて焼玉エンジンの機船を用い手動巻揚機による底引網漁開始⇒動力化と漁法が全道に広がる。

　大正５(1916)年、自立経営を目指す漁業経営者（ポンアヨロ～シキウ）が集い漁業組合設立。初代組合長に渡辺吉次郎（アヨロ）が就任。

・漁獲物の処理：イカはスルメ、タラは素干し、イワシとカレイは魚粕・魚油に製品化、鮮魚はホッキ、海藻ではコンブ・ギンナンソウなど。

＊しかし「駅」がないため、漁組市場から輸送するにも山道を登別駅まで３Ｋｍ、敷生駅までは平坦地であったが６．３Ｋｍの道程があった。もっぱら馬車に頼るも雨が降ると何日もぬかるみで身動きが取れず（１駄８００Ｋｇ積）、必死の思いで運んだ。

＊大正６(1917)年、クッタリウスの宮下丑太郎は、網を持った若い衆を乗船させる方式を考案。⇒網にかかった魚は乗組員のものになるが、漁獲の１割は船賃として船主に収める「てんで網」方式を考案。

・てんで（それぞれ）に網をもち、獲ったものはてんでのものとなる。

＊この結果、乗組員の労働意欲は盛んとなり、互いに競って精を出した。浜は活気にあふれ、腰を落ち着け定住する漁師たちが増えて行った。

④アヨロ停車場開設と小学校移転問題

＊明治２５(1892)年、鉄道開通。駅置かれ人口急増（１３年６９６人、２５年１，０５７人、４０年３，１３１人）。

・大正５(1916)年、漁業組合を設立し、翌６年、専用漁業が認可され

漁獲高は格段に向上したが、問題は輸送であった。遠く、しかも悪路での輸送を解消するには「駅の新設以外なし」と考えた住民は「停車場開設期成同盟会」を結成し、会長に敷生郵便局長藤井久市、副会長にクッタリウス石井宇之助を選出し、鉄道院総裁に陳情書を提出するなどしていたが、とん挫していた。

＊大正１０(1921)年頃、上田圓正と名乗る真言宗の僧が現れポンアヨロ観音堂に住みついた。圓正は住民の世話をよくしたが、政府要人や高級官吏との折衝に秀でていたことから、同１４(1925)年、住民は新たに停車場設立期成会を結成し、圓正を会長に選出し運動を再開した。

＊翌１５年、道庁長官に意見書、鉄道大臣に請願書提出。昭和２(1927)年、貴族院・衆議院に陳情。鉄道省で採択され駅開設が決定。同３年８月５日、営業を開始。同５５年、民間人による業務委託駅、５６年１月、駅舎改築し、６１年無人駅となる。現在は登別駅管理下。

＊クッタリウスで漁場経営を行うとともに学務委員(現教育委員)でもあった石井宇之助は教育の必要性を痛感し小学校設置運動を熱心に展開。

その結果、石井の私費により同３５(1902)年１０月、現公民館横に敷生簡易教育所が認可され、教員２名児童３０名で開校した。

＊その後運動の成果が実り、大正３(1914)年２月、尋常小学校に昇格し虎杖小学校と改称された。その後、アヨロ・ポンアヨロ方面の人口が圧倒的に増えたので、両地区の人々はアヨロに学校を移転すべきと要望を出したが実現に至らぬままになっていた。

しかし、昭和２年７月の石井の死亡が引き金となって移転問題は一挙に噴出。村議会は同年８月、アヨロへ移転することに議決したが、両派で争奪運動が起き、条件付きでアヨロの移転を承認した。

１.石井宇之助の功績碑を建立し後世に伝える

２. 新駅名は小学校と同じ虎杖とする

３. 小学校の名称は変更しない

４. 新駅の設置場所はクッタリウスの現小学校真裏とする。

・駅の開設と小学校の移転問題が同時期に重なったため、条件の中に折込まれた。

⑤　**上田圓正**

＊虎杖浜駅開設に功績のあった上田圓正は昭和３(1928)年新駅開設後、駅の山側に居を移し、乗降客に西国三十三観音を参詣してもらおうと仏像を集めた。しかし１１年、詐欺横領罪に問われ服役し、獄中死を遂げた。これらの仏像は青峯山観音寺に移設・安置されている。

＊圓正の住居跡には「上田圓正上人顕彰碑」が昭和４８年８月、前虎杖浜郵便局長高橋淳の浄財により建立されている。なお、虎杖浜郵便局は昭和７(1932)年の開局。

⑥　**青峯山観音寺**（大正４(1915)年開山）

＊大正４(1915)年、渡辺義三・渡辺吉次郎ら１８名が発起人となり、三重県鳥羽市の真言宗の古刹青峰山正福寺より海上安全・大漁満足の本尊（御仏体）を受け、現在地の高台にお堂を建立、観音堂と称した。

＊昭和１４(1939)年、説教所を開設、同２２年、寺号を公称した。４０年１０月、檀徒浄財寄付１，２００万円により本堂・庫裡・納骨堂完成、現多宝塔の新本堂は６２年９月に完成したもの。檀家２１０戸。

⑦　**虎杖浜神社**（昭和１８(1943)年改築移転）

・明治３０(1897)年、桜井富吉が京都の官幣大社稲荷神社より屋船久能知神、屋船豊受姫神・彦狭知神の３祭神を勧請し創建、稲荷神社と称した。同４５(1912)年社殿を新築したが昭和１８(1943)年現在地に移し社殿を改築した。社殿は青森県から取り寄せたヒバ材。２９年９月、虎杖浜神社と号す。６０年に江の島神社を合祀し、毎年７月８～９日に例大祭を挙行。

⑧　**野口屋又蔵功績碑**（大正４(1915)年建立）

＊野口屋は天保１２(1841)年、松前藩から白老場所の請負を許され、アイヌとの交易権や漁業経営の独占権を得、明治維新まで代々白老場所の経営にあたった。

＊この頃の白老場所は鮭の産地とされていたほか、イワシやタラなども豊漁で、特にイワシは寛政１２(1800)年から油粕の原料として盛んに生産された。又蔵はこれらを箱館(函館)に送り売り捌くとともに、それまで前例のない養殖事業を手掛けた。それは昆布の養殖で、当時非常に高価であった昆布が僅かながらもアヨロの浜で取れることに目をつけ、弘化２(1845)年から３～４年にわたり箱館近郊の海から昆布の付着した岩を運び海中に投石した【昆布養殖の端緒】。今日昆布が繁殖して「虎杖浜昆布」として特産物となっているのも又蔵の功績によるところが大きい。

＊明治２(1869)年の場所請負制廃止後の同７(1874)年、野口屋又蔵一族が函館より虎杖浜に移住し、戸長などを歴任するなど村政を支えたことから、何代にもわたるこれらの功績を讃え、大正４(1915)年７月、白老・幌別両郡の有志と両水産組合が功績碑を建立した。昭和５９年現在地に移設。

⑨　**明治天皇駐蹕碑**（明治４４(1911)年建立）

＊明治１４(1881)年９月４日、天皇巡幸を記念し建立。

⑩　**ポンアヨロ庚申塚**（大正８(1919)年建立）

＊明治３５(1902)年、網元宮森太惣八（明治２８年室蘭よりポンアヨロ移住。新潟出身）が病弱だった二女スエの健康延命を祈願し庚申塚を建てた。

・庚申信仰は中国の道教に由来する平安時代からの民間信仰で、６０日目に巡ってくる庚申(カノエサル)の夜、眠らずに徹夜して長寿を願う習わしがある。スエの病が快方に向かったためか、その後この信仰は近隣に伝わり、ポンアヨロ部落全体の健康を預かる守り神として祀られるようになった。大正８(1919)年、信者たちは石灯篭一対と鉄製鳥居山門を奉納建立。

⑪　**アヨロ庚申塚**（昭和５１(1976)年建立）

＊明治４３(1910)年、新潟から漁業移住した人々が海上安全・除災を願い虎杖浜神社山手側に庚申塚を建てた。大正９(1920)年松田スエが鳥居２基を奉納した。申年にあたる昭和５１(1978)年渡辺カツノ、松田スエ、松田リエ、本間ミツノ、本間ハルの５名が発起人となり寄付を募り、ブロック作りのお堂を建立、盛大に祭を執行した。信者は庚申の日に集まり、家内安全・大漁を祈願している。

⑫　**水難者慰霊碑・魚霊碑**（昭和５９(1984)年建立）

＊白老には水難者慰霊碑・魚霊碑がそれぞれ２基ある。神社境内のものは昭和５９年９月に虎杖浜漁業協同組合により建立され、毎年８月１６日に祭礼が行われている。

⑬　主な海難事故

＊昭和５(1930)年８月１７日、山田三蔵（４９歳）が子息ほか１１名で電気着火式機関を取り付けた川崎船でイカ釣りに沖へ出航。急な時化に遭い転覆、全員不明。

＊昭和１５(1940)年４月１２日、須貝作次郎所有の第１３松島丸は船長ほか６人を乗せてメヌケ延縄漁に出漁。就寝中一酸化炭素中毒により須貝留治（２８歳）ら１８歳から５５歳の乗組員６人が死亡。

＊昭和３０(1955)年７月２１日、中部サケマス流網漁のため弥栄丸に乗船し、千島オンネコタン島沖で操業中浸水沈没。渡辺富蔵（３３歳）ら１９歳から３３歳までの乗組員１０人全員が不明。

⑭　中登別地区における白老・登別の境界紛争（表面化は明治２９(1896)年）

＊明治２３(1890)年、北海道炭鉱鉄道㈱による室蘭線の鉄道敷設工事が始まり、各地は入込み人夫で賑わった。登別村はトンネル工事のため７００～８００人の人夫とともに商人も来村し、宿屋や飲食店、理髪店、浴場など数十件が開店した。工事後は潮を引くように人は去ったが、白老・登別両駅が開設され、そのまま居残り定着した人もあり戸数・人口とも増加した。中登別地区においても人が住みついたが、日常生活・用品等のすべてが登別に依存していた。

＊虎杖浜も昭和３(1914)年、駅が開設されるまでは交通はもちろん日用品もすべて登別を利用し、小学校高等科も登別小学校へ通学していた。本来の通学先は敷生小学校であったが、当時の敷生小は敷生本村（現禅照寺付近）にあったことから、ポンアヨロの人たちにとっては登別小学校の方がはるかに近く安全であり、登別に通学させたいと親が要望した。

＊明治３０(1897)年６月２０日、中登別の無所属部落は登別村の所属

と決定した。それに対して、野口又蔵、相吉三十郎の白老村両総代人は「ポンアヨロは古来より白老郡内であり、旧土人が定めた郡界も口碑にあり、また明治初年白老領有の一関藩と幌別支配の片倉家内が協約し記名調印した書類もあり境界は以前から定まっていた。しかし、近年移住した農民たちが登別に近く日用品その他便利のため管轄替えを要請したため承諾した」としている。

⑮　明治４０年代越後の漁業移住者が拓く

＊明治２５(1892)年から大正１１(1922)年までの北海道への移住者の出身地は新潟県が最多。次いで青森、秋田、富山、石川。職業別では農業、雑業、漁業、商業、工業の順であるが、漁業では青森、石川、秋田、新潟、岩手の順であった。

・新潟県人の越後衆は働き過ぎるのか、自主独立の精神が旺盛なのか「越後衆の歩いた跡には草も生えない」と揶揄されたほどであった。

＊明治４２(1909)年頃から虎杖浜(ポンアヨロ)に移住した人たちは、新潟県藤塚浜、次第浜を主力に網代浜、太郎代浜、島見浜の人たちで、北蒲原郡の下越後出身である。定住は明治２８(1895)年、当時無人のポンアヨロに居を構えた宮森太惣八が最初。これより地縁血縁を頼りに増加。

＊昭和１１年の虎杖浜地区の戸数はクッタリウス２７、アヨロ１５８、ポンアヨロ３５の計２２０戸、人口は１，２７１人で、このうちの７０％は越後衆。

　また、本間４０、渡辺２９、須貝１３、吉田１１、宮森１０、高橋９、松田８、小林７戸など同姓多く、屋号で呼ぶことが習わし。

⑯　倶多楽湖の養殖事業

＊透明度で摩周湖と全国１、２を争う倶多楽湖（水深１４８ｍで４位、周囲８Ｋｍのカルデラ湖。４万年前までの噴火で湖を形成）は、もともとはアイヌ語でクッタリ・ウシ・トで、いたどりが群生している湖のこと。

雷鳴が激しく轟くと「クッタラシトから雷神が昇天する音だ』と言って、雷神の棲む沼との伝承もある。

・白老町域だが、登別市に属していると勘違いしている人も多い。

＊明治末から大正の終り頃にかけて、小樽水産学校長を退職した中尾節蔵（後に北大講師）と妻トメは、この湖でヒメマス（チェプ）を放流するなど養殖に挑戦した。明治４２(1909)年に十和田湖から、同４４年には支笏湖からヒメマスを放流。大正１０(1921)年には体長７５ｃｍ、幅２４ｃｍ、重さ４．５Ｋｇにも及ぶものがあり、この頃までは漁獲が豊富であったとの記録が残る(昭和１０年、節蔵、同１７年、トメ逝去)。

⑰　虎杖浜たらこ

＊大正以降、漁船の動力化が進み沖合漁業に発展したため、タラ・スケソウ・カレイ類の漁獲高は急増。特にスケソウは寒干しされ、ボウダラ（一次加工）締めという独特の機械で縛られ、函館の業者を通して関西方面に出荷された。しかしタラの身から取り除かれたタラコやタチは、内臓や骨とともに魚粕の原料でしかなかった。魚粕は畑の肥料としてごく安価であった。「冬季の漁獲量が最も多いスケソウの魚卵タラコを二次加工し商品として売れないものか」。先進地の岩内から指導者を招き製法を学ぶ。

　昭和２０年代は凶漁で、生きているスケソウの卵とタチを混ぜ合わ

せ海に放流し繁殖を図ったことも。

＊３０年代からスケソウ漁回復、水揚げされた魚の大半は小樽へ運ばれ「オタルコ銘柄」のタラコとして全国に出回る。元来、この地方のスケソウ魚卵は「胆振系」と呼ばれる良質なものであった。ある時、築地中央市場の虎杖浜産タラコがある会社（マルナカ）の目に留まった。同社では浜の女性たちを招いて高級タラコをその目で確かめさせた。タラコは品質によってきれいに選別され、見た目にも美しく容器に菊状に並べてあった。女性たちは工夫改良の威力を身をもって知り、その仕事ぶりが一変した。その後随所に改良が施され、間もなく「北海道白老町虎杖浜産スケソウタラコ」の銘柄で市場最高級の折り紙がつけられるようになった。

⑱　虎杖浜温泉

＊昭和３８(1963)年１１月、登別トンネル傍で、登別の石川小二郎により地中６７０ｍから毎時２２０Ｌ（４８℃)の温泉が噴出。大きなニュースとして話題になった。以降、近隣で多数のボーリング調査が行われ、同４０年当時で５９の井戸から総湯量毎分１，０００㎥、１日平均４５０万㎥が沸き出し、登別温泉の湯量３６０万㎥をはるかに超える「日本一の湯量」といわれた。

＊虎杖浜地区を始め、臨海区・竹浦地区でも温泉開発が急ピッチで進み、宅地分譲や国道筋を中心に旅館・ホテル・貸別荘・ファミリーセンターが立ち並んだ。しかしながら、日本一の湯量を誇っても資源は無尽蔵ではない。乱掘が相次いだことから温泉利用業者もこれを憂い、組合を設立し自主規制するなどしたが、４４年頃から自噴力が弱まり、湧出量は掘削当初の５７％に減少し、水温も低下するなど枯渇現象となった。

＊５１年、北海道温泉審議会は虎杖浜・竹浦地区の温泉保護地域に指

定し掘削全面禁止を打出した。６０年、各地にあった４団体の組合を「虎杖浜・竹浦地区観光振興促進連合会」として大同団結して設立し、平成２年９月には「虎杖浜温泉」と統一した。

⑲　**虎杖浜越後踊り**（白老町指定無形民俗文化財）

＊越後踊りは明治４０年頃に新潟県北蒲原郡から移住してきた人々により伝えられ、小樽高島の越後踊りと同じ系譜を持っている。平成２年虎杖浜越後踊り保存会が結成され、踊りを昔の形に復元して保存。小中学生を指導するなど地域に普及伝承している。

＊平成１２年には道内の越後踊りとして、初めて無形民俗文化財に指定された。毎年、生活館前での盆踊りやパレード、しらおい港まつり・登別漁港まつりなどで、郷土芸能として披露されている。

虎杖小学校

二宮尊徳像

石井宇之助顕彰碑

ＪＲ虎杖浜駅

上田圓生顯彰碑

虎杖浜神社

野口屋又蔵功績碑

明治天皇駐蹕碑

アヨロ庚申塚・ポンアヨロ庚申塚

海難殉職者慰霊碑・魚霊供養碑

ポンアヨロ台地

アヨロ鼻灯台

アヨロ海岸

ポンアヨロ海岸

ポンアヨロ観音堂

ポンアヨロ観音堂地蔵群

青峰山観音寺

竹浦・虎杖浜温泉街

養鱒場（虹鱒釣り堀）

編　集　民族共生象徴空間整備による白老町活性化推進会議

監　修　白老町教育委員会生涯学習課

問合先　仙台藩白老元陣屋資料館　TEL0144-85-2666